

## ハス

ひさかたの 雨も降らぬか <sup>はちす</sup>蓮葉の  
<sup>た</sup>溜まれる水の 玉に似たる見む 詠人未詳

今夏の猛暑のように、雨が降らなかったのであろう。蓮の葉に溜まる玉に似た水滴を見たいものだということである。蓮の葉に盛った食事で宴席をしている時に、主人が蓮の葉に掛けて歌を作れと命じたので咄嗟にできた歌である。熟果が蜂の巣状になることから蓮は「はちす」と呼ばれていた。蓮の葉には撥水性があるために、水銀のような水玉ができる。

大賀ハスの実は今から二千年前の弥生時代後期のものと推定されているので、仏教渡来以前から日本では親しまれていたであろう。蓮は観賞用としてだけでなく、食用、薬用としても利用されて来た。地下茎の蓮根は食べるだけでなく、民間療法では下痢止めとして使用されていた。花はベトナムなどでは蓮茶として飲用されている。種は清心蓮子飲にも含まれているように、漢方では心熱を清ます働きがある。ちなみに蓮の花言葉は「清らかな心」だそうである。

蓮といえば、何と言っても仏教である。古代インドでは聖なる花とされている。泥から生えて気高く咲く花は、俗世にまみれず清らかに生きることの象徴として捉えられ、このイメージが仏教にも継承されて行く。『日本書紀』によれば、日本に公式に仏教が伝来したのは欽明天皇13年(552年)で、百済の聖明王が仏像とともに齎した。聖明王は覇権争いをしてきた高句麗や新羅に対抗するために、支那の梁に朝貢するとともに、日本の軍事力にも期待したのである。この時大臣であった蘇我稲目は、「西の諸国は皆仏を敬っている、日本だけが背く訳にはいかない」と、欽明天皇に進言した。蘇我氏は渡来人との関係が深かったため、海外の情報に精通していたのである。一方大連であった物部尾輿は、「日本は古来天神地祇を祭って来た。もしも蕃神を拜めば国神が怒るであろう」と反対するのである。後に稲目の子・馬子と尾輿の子・守屋の時代になっても崇仏派と廃仏派の対立は続いた。西欧文明が押し寄せた明治維新に似ている。馬子の妹二人(堅塩姫と小姉姫)は欽明天皇に嫁ぎ、前者は用明天皇と推古天皇、後者は穴穂部間人王女、穴穂部王子、崇峻天皇を産む。そして用明天皇と穴穂部間人王女との間に産まれたのが聖徳太子である。

崇峻天皇の時代、守屋が次期天皇に推した穴穂部王子は、推古天皇を担ぐ馬子によって殺害される。また馬子は守屋と戦火を交え、守屋及びその子らを誅殺し、物部氏を衰退させた。さらに馬子は渡来人を使って崇峻天皇まで殺害するのである。母方の叔父二人を殺された聖徳太子は複雑な心境であったろうが、それでも仏教を広めていた馬子側に立っている。推古天皇が即位すると、馬子は聖徳太子を皇太子に推挙した。天皇家と蘇我氏の血を引く学者肌の聖徳太子は、どろどろとした醜い争いに巻き込まれ、深い懊悩の中で、初めて真の仏教に目覚めたのであろう。「和をもって尊しとなす」十七条憲法を制定している。

『秀真伝』も和の重要性を説く古代叙事詩であるが、ここでは天照大神は男神として登場する。実はその後の古伝『先代舊事本紀』(偽書説もあり)は、聖徳太子亡き後、馬子が編纂したもので、推古天皇までの歴史が綴られている。そして天照大神は女神に変わっている。恐らく前代未聞の初めての女性天皇・推古を正当化するために、馬子が天照大神を女神に捏造したと思われるのである。

聖徳太子が「勝鬘経」を講義しているときに、天から蓮の花が降り積もったという逸話が残されている。彼が関係した寺院の名には「蓮」の字を配したものが多い。泥の中に咲く清らかな蓮、聖徳太子にはこの花が似合っている。

(山人)

束  
束束束